

サトウハチロー

市民の視点で

「体も十分回復したはず。うまいくれよ。景さんはおそろしな顔で、両手に抱えたカマを潮に浮かべ、そっと手を放した。このカマは、慕って動けなくなっていたところを保護され、景さんのもとへ運ばれてきたものだ。その後の重慶のことがあって、元氣を取り戻し、今日はい

⑥ 動物医走る

第340話



地味な研究が実を結ぶ

いよ、野性に戻る目だ。久しぶりに自然に接したカマは、うれしそうに笑み始めた。水の感触を確かめるように体を震わせ、岸から離れていく。

頼る本なく試行錯誤

「二度驚きると、羽の脂がなくなり、羽力を失ってしまうのか……」。景さんはがく然とした。カマは、首を懸命に持ち上げ、羽をばたかせている。かつて水の王を自由に泳ぎ回った記憶を、必死で呼び戻そうとして、目のようにした。小屋を改装した保護観察舎で、大規模獣用・小型鳥獣用の大小種類のりへり舎、飼育設備を整えた。まず各地の会館が鳥獣を識別したうえでセンターに搬入。そこで獣医を検査医師でつくる医療チームが手術や処置に

「もこのカマは、野性では生きられない。連れて帰るべきところか」。しばらく考えた。『いや、一生人間に飼われて過ごすより、自然に抱かれたまま死ぬ方が幸せなのではないか』。景さんは後姿を振り向かず、そのままだと云った。傷付いた野生動物の治療、保護は試行錯誤の連続だった。『一頭一頭を拾ったその運が人々だけに、本棚をひっくり返して、その鳥のえさや習性を調べる。しかし、頼るべき教養書や参考書はほとんどない。かようなのが現状だ。』人間の目や舌を頼って、空くらひいぞアオサギの幼鳥はおかひつくりの診察

した。オオカミを保護した時は、注意していたつもりだったがつめて指を引き裂かれた。ウグイスの鳥の嘴の骨折は、ボールペンの芯を筆尖にした、アオカマの左翼骨折はボール紙の羽根をえさに使った。手作りの医療器具も自分で開発した。『うけに成功し、重傷を負った。食べ過ぎで死んでしまった。野生動物にふれればかわるほど、難しさを痛感する。』「野生動物の治療、処置に慣れさせている人たちは、ほかにいるはずだ。そうした知識や経験をまとめる、野生動物の治療、保護に役立つ参考書を作ってみよう」。景さんは心に決めた。

サトウハチロー

市民の視点で

「森田さんご公園」のオープンから四年後の八九年、森田さんは同じ自然の環境内に「道野動物保護センター」を設立した。一人は鳥類動物の増加に対応してはいない、というのが設立の動機だったが、できたら多くの人たちに野生動物の保護活動にかかわってもらいたい、という意図があった。

⑥ 動物医走る

第340話



牛を診察して回る

メンバーは約十人。獣医のほかに自然保護団体や町役場の関係者、ボランティアが仲間として加わってきた。施設は、うぶ公園内にあった飼育

手探りで輪を広げる

あたり、血をふくエックス線検査などを実施する。その後、リハビリを続け、回復したものは保護された場所まで運んで放す。死んだものは解剖説明のため解剖。本学へ送って衛生車や微生物、環境検査などを行う。

景市は北約三十キロある薩摩の町。広大な自然環境に隣接し、「北海道の秘境」ともいえる。チヨウツルが舞い降りる。景さんは森田さん同様、家畜診療所に勤める獣医。百戸余りの農家を車で走り回り、六人の同僚と二万三千頭以上の牛を診察している。

「施設建設、借金の三十万円は森田氏が責任をもって何かなさる」。センター設立の際、森田さんは関係者に配布した案内にこう書いている。景さんは、もともと埼玉県で生まれた。東京農学部の獣医学科卒業後、「鳥がいっぱいいる」という理由で、北海道を生活の場に移した。もちろん黒沢さんにとっ